SYONEN SYOZYO

Sekai Bungaku Jenoyû

たからのひょうたん　張天翼
三人の先生　朱明政　朱明軍
故郷・宮しばい　魯迅
ほか13編

少女
世界文学全集

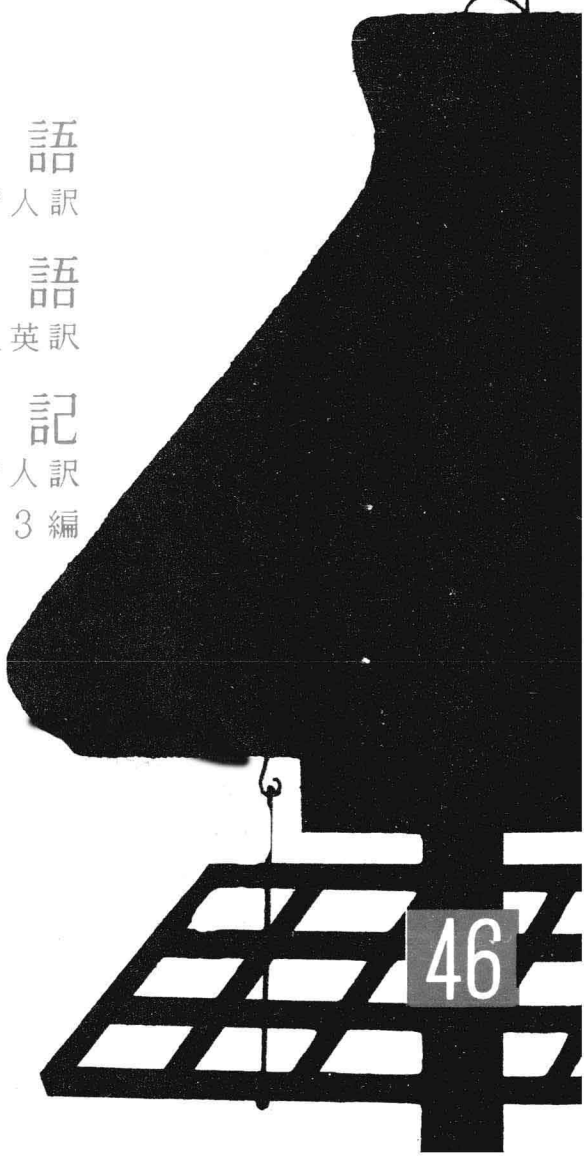
日本編(2)

今昔物語
福田清人訳

平家物語
杉森久英訳

太平記
福田清人訳

ほか3編



46

講談社

少年少女世界文学全集46
日本編　第2巻

N. D. C. 913
講談社　昭和34
406p　23cm

昭和34年7月20日発行
訳者代表　福田清人・伊藤佐喜雄
発行者　野間省一
印刷者　北島織衛
発行所　東京都文京区音羽町3ノ19　株式会社 講談社
振替口座東京 3930　電話大塚 (94) 大代表 3111
印刷　大日本印刷　背皮　小林榮商事
製本　毛利製本
本文用紙　本州製紙　クロス　日本クロス
定価　380円

© 福田清人・伊藤佐喜雄　昭和34年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

PRINTED IN JAPAN

目　　次

少年少女 世界文学全集
第 46 巻
日本編第 2 巻

今昔物語……福田清人訳……9
かめのおしゃべり……11
さるのいきぎも……14
お山の石塔……18
一本のわら……22
わざくらべ……31
いもがゆ……36
はな……43
平家物語……杉森久英訳……47
殿上の闇討ち……49
鹿の谷……51
陰謀はばれた……53
西光きられる……55
鬼界が島……56
ゆるしの手紙……59
有王……63
立ちあがる源氏……67

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

信連……69
名馬……72
橋合戦……73
高倉宮のさいご……77
早馬……77
富士川……80
木曽……82
清盛の死……84
清水冠者……86
倶利迦羅谷……86
実盛の討ち死に……87
平家都落ち……90
都の義仲……93
瀬尾のさいご……95
つづみ判官……98
宇治川の先陣……99
義仲のさいご……103
ひよどりごえ……106
さかおとし……107

敦盛のさいご……109
逆櫓……112
おおぎのまと……114
弓ながし……116
壇の浦の合戦……117
安徳天皇の身なげ……119

太平記……福田清人訳……123

討幕のはかりごと……125
阿新丸のかたきうち……132
後醍醐天皇の笠置落ち……138
赤坂城のたたかい……143
児島高徳……148
護良親王の熊野落ち……151
いぬ合戦……159
吉野城のたたかい……161
正成千早城の奮戦……166
後醍醐天皇隠岐の島脱出……171
六波羅ぜめ……178

鎌倉ぜめ……182
建武の中興……187
北条時行の乱……192
足利尊氏のむほん……195
尊氏九州落ち……200
桜井のわかれ……203
後醍醐天皇吉野落ち……208
新田義貞の戦死……210
平和のきざし……213
義経記……217（伊藤佐喜雄訳）
鞍馬の巻
おいたち……219
母のねがい……220
武芸のけいこ……223
なつかしい寺……226
弁慶の巻
元服……230
伊勢三郎……233

あばれ法師……237
清水坂……241
明暗の巻
なみだの対面……246
うたがう心……249
堀河の夜討ち……253
船いくさ……257
吉野の巻
落人……260
さまよう静……263
身がわり……266
忠信のさいご……268
鎌倉の巻
谷わたり……273
かくし芸……276
うわさの女……279
舞いすがた……282
落花の巻
みずうみの宿……286

主を打つ……290
奥州武士……294
みんな敵……296
衣川のたたかい……298
お伽草子……高野正巳訳……303
はちかずき……305
はまぐりひめ……314
中将ひめ……320
唐糸と万寿……325
福富長者……328
たなばた……333
謡曲・狂言物語……丸岡明訳……345
猩々……347
邯鄲……349
巴……353
隅田川……358
鉢木……364

附子……372
柿山伏……379
千鳥……385
解説……391
読書指導……401

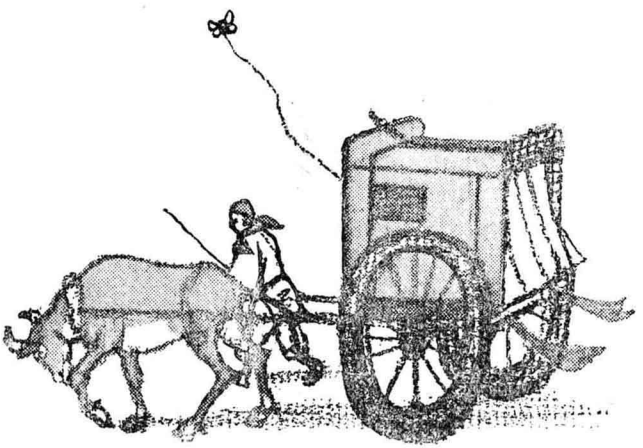
訳者
読書指導研究会
滑川道夫
野村純三

装本　池田仙三郎
さしえ　久米宏一
羽石光志
古沢岩美
石井健之
森村宜永

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

今昔物語

福田清人訳



今昔物語について

今から八百年以上もむかし、平安朝の末ごろ、この物語はできました。そのなかの多くのはなしが、「今は昔」と書きだされているので、この名がつけられました。

それには、インド、中国、そしてわが国の、めずらしく、おもしろいおはなしが千以上もはいっております。こんな多くのおはなしを集めたことは、世界的に有名な「イソップ物語」や「アラビアンナイト」にもまさっていることです。

日本のむかしにもこんな物語があったことは、世界にほこっていいでしょう。そのころ仏教の教えが、ふかく国民の心にしみこんでいたので、おはなしにもかなり、そのいろどりが加わったものがあります。ここには、その多くのおはなしのなかでも、とくに代表的なものをえらんでのせました。このなかの「いもがゆ」や「はな」は、芥川龍之介が、これを題材にして新しく小説に書きかえたことでも有名です。

(福田清人)

さしえ・久米宏一

かめのおしゃべり

むかし、むかし、天竺（インド）の国でのお話です。

ある年、ひどいひでりがつづいたことがありました。お日さまがかんかんてりつけて、くる日もくる日も、一てきの雨さえふらないのです。土地はからからになって、しめったところは、どこにも見あたりません。いままで青々としげっていた草も木も、すっかりかれてしまいました。ある池に、ながいあいだすみついていたかめがいました。その池の水も、このひでりにあって、すっかりひあがっていました。

「とうとう、水がなくなってしまったな。このままでは、もう死ぬのをまつばかりだ、どうしたらよいかな。にげだすにも、池のまわりのがけがけわしくて、とてものぼれないし…。」

よわりはてたかめは、首をひっこめて、じっと考えこんでしまいました。

ちょうどその時、バタバタという音がするので、見ると、一わのつるがまいおりてきて、ひあがった池のそこを、あちこちと、えさをあさって歩きまわっています。

「そうだ、つるさんははねがあって、空をとべるから、どこか水のあるところへつれていってもらおう。」

かめは、のそのそとはって、つるのそばへちかよっていきました。

「もしもし、つるさん、つるさんははねがあって、空をとべるからいいですね。高い空から見ると、きっとながめがよいでしょうね。」

「うん。なんといっても、大空を、あるいは高く、あるいは低くとぶのは、よいきもちだね。春には、野や山にのびだした草木のわかばの美しいながめ、夏には青々といろどられた田やはたけ、秋は、山から山へ、いろとりどりのもみじの美しさ、冬は冬で、まっ白いしもや、きれいな雪げしき、こおりついて、かがみのようにきらきら光る川やみずうみなど、一年じゅう美しいけしきばかり見てくらしているのさ。それ

にくらべると、かめさんはおきのどくだね。きみは、こんなにちっぽけな池だって、すみからすみまで知らないんだろう。」

「そうなんですよ。そのうえ、ごらんのとおり、このひでりで池の水もすっかりなくなってしまい、死ぬか生きるかの、くるしいめにあわされているのです。つるさん、おねがいです。なんとか助けだしてください。」

「それはかわいそうだね。このままほっといたら、死ぬのをまっているようなものだからね。」

「そんなにあっさりいわないでください。わたしとあなたは、人間たちからまで、つるかめと、ならべていわれるほど、切っても切れないなかじゃありませんか。どうか助けてくださいよ。おねがいします。」

「それでは、わたしがよいところへあんないしてあげよう。しかし、かめさんにははねがないし、といって、わたしがおぶっていくこともできないし、ええと、口でくわえていくわけにもいかないし、どうしたらよいかな。さて、こまったな。」

つるは、ながいくちばしをうちふって、考えこんでしまいました。

「そうだ、よいことを思いついたぞ。」

とつぜん、つるが大きな声をだしました。

かめも首をながくのばして、つるをながめました。

「それは、こうするのだ。一本の細いぼうきれのまんなかを、おまえさんがしっかりくわえるのだよ。」

「へえ‥‥。そしてどうするのです。」

「いいかい、そしたら、わたしがもう一わのお友だちをよんできて、二わでぼうの両はしをくわえて、おまえさんをぶら

さげてとんでいくのさ。」
「なるほど、いい考えですね。ぜひそうしてくださいよ。たのみます。」
「しかし、ことわっておくけれど、おしゃべりはだめだぞ。生まれつきおまえさんは、おしゃべりだからね。とちゅうでおしゃべりしたら、ぼうきれから口がはなれるよ。はなれたらおっこちて、もう命はないからね。どんなめずらしいものがあっても、おたがいにぜったい口をきかないことにしよう。いいかね。」
「ああ、そのてんなら、だいじょうぶですよ。つるさんがよいところへつれていってくれるのでしたら、わたしは、ぜったいにおしゃべりなんかしませんよ。命にはかえられませんからね。どうぞおねがいいたします。」
まもなくつるは、一本のぼうをくわえてきました。もう一わのつるのお友だちも、つれてきました。
ぼうの両はしを二わでくわえ、まんなかを、しっかりとかめにくわえさせると、さっと、大空高くまいあがっていきました。ぐんぐん空高くのぼるにつれて、ながいあいだすんでいた池も、だんだん小さくなっていきました。
生まれてはじめての空の旅です。山や川や、高いみねや、深い谷など、まだ見たこともない大きいけしきが、つぎからつぎへとかめの目にはいってきます。
かめは、すっかりおどろいてしまいました。
あまりの美しさに、われをわすれて見とれてしまいました。それとともに、つるとのたいせつなやくそくも、うっかりわすれてしまって、
「つるさん、ここはいったいなんというところでしょうね。」と、口をきいてしまいました。
そのとき、つるも思わず、つりこまれて、
「ここはね……。」
と、口をひらいたとたんに、かめは何千メートルという高い空中から、まっさかさまにおちて、とうとう命をうしなってしまいました。
このように、あまりおしゃべりなものは、命をうしなうことさえも、わすれてしまうものであります。

さるのいきぎも

むかし、むかし、天竺の国の海ぎしに、小さな山がありました。

その山に、一ぴきのさるがすんでいて、木のみをたべてくらしていました。

また、そのあたりの海には、夫婦のかめがすんでいました。

ある日、かめのおよめさんが、元気のない声で、夫のかめに話しかけました。

「あなた、わたしはあかちゃんができそうです。しかし、おなかに病気があるので、きっとお産がたいへんでしょう。それで、あなたがお薬をとってきてのませてくださったなら、わたしも安産できるのでございますが……。」

「ほう、それはどんな薬かね、なんでもさがしてきてあげるよ。いってごらん。」

「きくところによりますと、さるのいきぎもが、おなかの病気にいちばんきくとのことでございます。」

「なに、さるのいきぎも。……そんなものならわけないよ。海ぎしのお山にさるがいるから、ちょっと行って、もらってきてあげよう。」

夫のかめは、すぐにでかけました。かんたんにひきうけたものの、さるのいきぎもをとるということは、まったくむずかしいしごとです。

「よわったな。いきなりさるに、『きもをくれ。』といったって、くれるものじゃないし、これはなんとか、さるをだましてとるよりしかたがないな。なにかいいちえはないかな。」

夫のかめが、あれやこれやと考えながらおよいでいるうちに、

「そうだ、いい考えがうかんだぞ。」

と、うれしそうに、ひとりごとをいいました。

さっそく海ぎしにあがっていくと、ちょうどうまいぐあいに、さるが山からおりて、すなはまにきていました。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com